

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

平成 21年 10月30日

財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 人文科学研究所

職 名・学 年 助 教

氏 名 古 松 崇 志

事業区分	平成21年度・短期派遣助成		
研究課題名	遼金元時代北京地区の仏教史の研究		
受入機関	中華人民共和国 北京大学 歴史学系		
渡航期間	平成21年9月1日 ~ 平成21年9月30日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 有( )		
会計報告	交付を受けた助成金額	400,000円	
	使用した助成金額	400,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	渡航費	100,000円
		滞在費	300,000円

## 成 果 の 概 要

古松 崇志（人文科学研究所）

報告者は、2009年9月1日から30日まで、中国北京市の北京大学に滞在し、北京大学図書館および中国国家図書館において、館蔵の遼金元北京地区仏教寺院にかかわる碑刻拓本資料の閲覧、調査をおこなった。また、北京での滞在期間を利用して、北京大学歴史系では二度にわたり研究講演（「遼慶州白塔建立の謎：考古・石刻資料よりみた遼代仏教史研究」、「契丹・宋間の外交儀礼」）をおこない、劉浦江教授をはじめとする関係研究者とのあいだで学術交流を活発におこなった。

今回の調査・研究の対象は、おもに北京大学図書館に所蔵される繆荃孫旧蔵の藝風堂および張仁蠡旧蔵の柳風堂の石刻拓本コレクションであった。いずれも貴重な拓本を数多く含む。とりわけ、報告者の研究テーマに関連してより重要なのは、前者の繆荃孫のコレクションである。それは、彼が19世紀末に地志編纂を担当し、初めて北京地方の石刻資料の悉皆調査と拓本採取をおこなったさいに集められたものである。遼代以来の仏教寺院が多い北京地方には、当時遼・金・元時代の仏教関連の碑刻資料が大量に残っていたが、これらの碑刻の多くが20世紀になってからさまざまな事情で破壊されたため、いまではこの拓本コレクションはきわめて貴重な資料価値を持つ。繆荃孫の拓本コレクションについては、『藝風堂金石目録』という目録が残っており、そのリストはよく知られているが、個別の碑文の内容については、拓影は現在のところごく一部をのぞきほとんど公表されていないし、録文も未知のものが少なくない。したがって、今回の調査では、報告者の研究テーマに関連ある部分の拓本の全面的な調査を目指した。

今回の調査をつうじ、繆荃孫および張仁蠡の集めた遼代仏教関連碑刻のうち、他に所蔵のないものについては、現在図書館で進めつつあるスキャン作業のために閲覧停止になっていたものをのぞき、基本的にすべて閲覧し、必要におうじ撮影と録文作成をおこない、『遼文存』『全遼文』『遼代石刻文編』など先学の作成した碑文録文のあるものについては、対校作業をおこなった。その結果、これまで収集してきた資料とあわせて、現在利用可能な遼代の北京地区仏教寺院に関連する碑刻資料の全貌をほぼ把握し得た。ただし、時間の制約から、金代については、ごく一部分を閲覧したのみにとどまり、また数量が圧倒的に多い元代については、ほとんど手が及ばなかった。目録より判断するかぎり、繆荃孫旧蔵の金元碑拓本はおそらくもっとも魅力的な史料群であり、今後のさらなる調査を期したい。

今回収集した資料をもとに、今後、さまざまな仏教寺院や仏僧にかんする史実を抽出してその歴史的な位置づけを分析し、当時大きな社会的影響力を持っていた仏教の歴史を総合的に把握・検討することをつうじて、ユーラシア東北部（中華本土北辺からモンゴル高原東南部、マンチュリアにかけての一带）で流行した仏教の連続性と変化の諸相を浮き彫りにし、従来不明な点の多い遼・金・元時代北京地区の国家支配や社会の実態を具体的に解明することを目指していきたい。